

使徒言行録6章1節～7節
『恵みと力に満ちて』

小川国夫という優れた小説家がありました。カトリックの信者であった彼は、聖書を題材にしたすばらしい小説を我々に残してくれました。小川さんがある本の中で、自分は10の10倍以上聖書を通読した、ということを書いておられました。小川さんがなくなられたとき、その枕元には、ボロボロになったフランス語の聖書が置かれていたということですが、とても考えさせられたエピソードでした。10の10倍と言えば百回です。百回以上の通読です。小川さんは、それは聖書がおもしろい本だからと言い、興味津々の本だからと書いています。だが一方で、むつかしい本でもある、ということを行っています。何回も何回も読む。面白いし興味深い、しかしむつかしい。その場合のむつかしさというのは、言葉の意味とか時代背景のようなことを指しているのではないでしょう。それは勉強すればある程度分かってくることです。小川さんの言葉をそのまま引用すれば「むつかしいから、いまだにイエスは霧の中にいます。ときに姿を見せるにしても、現れるたびにその顔が変わるようにも思えるのです。彼の全体像はつかめないのですが、だからといって、彼の言動の印象がぼやけているわけではないのです。それは鮮明で痛切なのですが、その奥にあるものがわからないのです。ただそこに何か焦点があることだけは感じられますが・・・」。むつかしいと小川さんが言っているのは、キリストが何をわたしに語りかけているのか、それを聞き取ることだ、といっているように感じます。新約聖書を読む、読むことで理解されてくるものがある。だが、ここでキリストがわたしに語ろうとしていること、キリストの胸の奥にある声を聞き取るのは、むつかしい。だからこそ、何度でも何度でも、読む。何度でも聖書を読むのです。

使徒言行録の6章を今日は聞きました。ここには最初の教会の中で起こったことが書かれています。それをできる限り精確に読むことが大事です。そして、そのうえで、そこから何を聞くのか、という大事なことも忘れてはならないでしょう。

「そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人からヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。」

最初のキリスト教会が生まれてから、どれくらいたったときでしょうか、次

第に信者の数が増えてきました。それは十、二十といった数ではなく、何千という単位だったのではないかと思われます。その中で一つの問題が持ち上がってきました。教会の中にはギリシア語を話すユダヤ人、この人たちはイスラエル以外の地、世界中に移り住んでいるディアスポラのユダヤ人で何らかの理由で、今はエルサレムにいる人たちなのですが、ユダヤで生まれ、ユダヤで育て、ヘブライ語を話すユダヤ人との間に、溝のようなものが生まれていたのです。ここには書かれていませんが、この二つのグループのほかに、外国人のグループ、異邦人グループも存在していました。が、その人たちはまだこの教会では少数派でしたから、大きなグループとしてはこの二つのグループがあった。ヘブライ語を話すユダヤ人はその土地の人、地の人です。ギリシア語を話すユダヤ人たちは異文化を経験している人たちです。苦情が出てきたのはギリシア語を話すユダヤ人たちからです。毎日の食事の分配のことで、自分たちの仲間のやもめ、夫のいない女性たちが軽んじられている、というのです。4章のところで教会の様子が書かれていましたが、教会ははじめから、貧しい人たちや社会的弱者に心を砕いていたようですが、それでもなお、教会の中で公平感を欠くようなことや、不満足感が出てきたのです。

そこには二つの面があります。一つは事実として、そういうことがあった、ということ。もう一つは、そこにこの二つのグループ間の、感覚の違いや溝が、微妙に関係していた、ということです。人間の集団ですから、別に初代の教会ばかりでなく、例えば町内会での、古くからの人と、新しく移り住んだ人たちとの距離感や感覚の違い、といったことを考えれば、どこにでもあることです。

使徒たちはそのことをどうでもいいこととは考えず、弟子をすべて呼び集めたというのですから、教会総会を開いた、ということです。そしてそこで、霊と知恵に満ちた評判の良い人を七人選出しようと提案するのです。それは、使徒たちが祈りと御言葉の奉仕に専念するために、こうした教会の中での事柄を担う務めにつく人を選出しようという提案でした。ただ選出した七人は使徒の単なる補佐役ではなく、ステファノのように、民衆の間で、しるしをおこない、み言葉も語ったのです。つまり役割の固定化のための選出ではなく、特に、教会の中でのこまごまとしたことも担いつつ、み言葉も語っていく、ということだったのです。

教会は七人を選出し、使徒たちは祈って、彼らの上に手を置いた、按手したというのです。そして使徒言行録は「こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムでひじょうに増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。」と書き記しています。

教会の規模が大きくなる。そこで苦情を申し立てる人たちが出てきた、ということ、信徒同士での意思の疎通がうまくいかなかった、ということでもあります。教会の規模の大小にかかわらず、意思の疎通がうまくいかない、ということは普通にあることです。まして、数千という単位の信徒になってきた教会の中で、しかも文化や、言語や、習慣の違う者たちの間で、齟齬が生まれるのは、当たり前のことです。その時使徒たちは、「祈りと御言葉の奉仕に専念」するため、教会の中に務めを担う人を選出した。ということは、使徒たちは教会の秩序というものを十分承知していた、ということなのでしょう。

教会にとっての生命線はみ言葉に聞き、み言葉を宣べ伝えること、福音を宣べ伝えることです。そのことに支障をきたさないよう、教会の中の秩序作りをしたということです。しかもそれは役割を固定するための制度ではなかった。わたしはこれこれの役割だ、決められたら、それ以外の役割はしない、というのではない、福音宣教ということはそれぞれが果敢になしつつ、あらたな務めにも任せられた、ということでしょう。こうした教会の形成がすすめられたこと、何を大事にして、教会の秩序、制度を整えていったか、今日の聖書は書き記しています。

そのうえで、わたしたちは今日の聖書個所から何を聞くのか。わたしは何を聞き取るのか。皆さん一人一人が聖書を読み、考えていただきたい。

一つのことを申し上げたいと思います。

教会は信者を増やし拡大していく。だがその中で、トラブルや、問題を生み出していく。教会の中には、いくつかのグループが生まれていく。それは困難を抱えていくことにもなるが、例えばギリシア語を話すユダヤ人たちがいることによって、異邦人伝道が前進していくことになっていく。

教会で選ばれた人たちの中には、ステファノのように、逮捕され、裁判を受け、石を投げられて殉教する、という道をたどる人も出てきました。教会そのものも大迫害にみまわれる。使徒言行録が語っていることは、教会の歩みは、わたしたちが普通に使う意味でのよいことばかりだったということではないし、大変なことばかりだった、ということでもない。教会福音を宣べ伝えて規模が大きくなっていく、そこにも新たな課題、問題が起きてくる。そもそも、福音宣教そのものが困難や苦しみを生み出していく。教会にとって順調であるとはどういうことなのか、何事もなく平穩に事が過ぎていくということなのか。ここには、そうやって順調ということを根本から見直す、大事なことが語られていると思います。

教会が教会として歩むということは、問題が起きないとか、トラブルがない、ということではなく、そうしたことを含め、教会というものをどこから考え始めていくか、ということです。

教会ということだけでなく、わたしたち一人一人にとっても、神からの委託、神から一人一人使命として与えられていることぬきの順調とは何か、使徒言行録は我々に問いかけているのではないか。

使徒言行録は、最初の教会が抱え込んだ、問題とか、困難とか、迫害、といったことをそのまま書き記していきます。それは、教会はたくさんの恵みもいただいたが、困難もあった、というようにまとめていいことなのでしょう。殉教した人は不運で、迫害に遭遇した人も不運で、そうでなかった人は幸運、ということなのでしょう。実際、そう理解している人は少なくないでしょう。しかし聖書はそうではない視点をわたしたちに与えているのではないか。

7節に「こうして神の言葉はますます広まり」という言葉があった。「こうして」とは、このように教会は、一人一人のものによって担われて、逮捕され、裁判にかけられ、かつそこでもキリストを証言し、迫害に遭う者一人一人によって、福音が担われて、神の言葉が広まっていった、ということです。広まりという言葉は成長するという言葉ですが、教会は様々なことに直面し、その都度揺さぶられながら、神の言葉に立つことを繰り返しながら、歩んでいく。そのことを通しても神の言葉は成長していく、ということをおもうとしているのでしょう。

教会にとって重要なことは、問題がないとか、困難がない、ということではなく、どういう時も、教会に集められた一人一人が神の言葉に聞き、その神の言葉を宣べ伝えていく使命に立っていくこと、なのでしょう。逆にその基盤が揺らぐとき、人の眼には順調に見える歩みであっても、それはまことの危機なのでしょう。